

同窓生が語る宮澤賢治

盛岡高等農林学校と柘植六郎教授と宮澤賢治 (16)

若尾 紀夫 (C昭39・院41)

「ずっと前に、私はある旅人の話を読みました。書いた人も本の名前も忘れましたが、とにかくその旅人は永い永い間旅を続けてみました。…盛岡高等農林学校に来ましたならば、まづ標本室と農場実習とを観せてから植物園で苺でも御馳走しやうではありませんか。…」

これは、盛岡高農アザリア会同人誌「アザリア1号」(大正6.6)に賢治が書いた「旅人のはなし」という文章である。

賢治は盛岡高農の来訪者に是非見せたいものとして、標本室と農場実習と植物園と苺をあげている。標本室は農学・林学・獣医学の様々な標本(果物、野菜、模型、動物標本、病理標本など)を展示している大きな標本陳列所(第1教舎と第2教舎の間にある62坪の平屋建物)(写真1)、農場実習は盛岡高農で



写真1 標本室(大正元年)



写真2 植物園での自啓寮同室生(賢治:中央、保阪嘉内:横臥)



写真3 苺畑と実習風景(大正10年)

学ぶ生徒の重要科目である。校内下台には植物園(写真2)・果樹園・見本園・分科園・蔬菜園・作物畑・桑園などがあり、植物園付近には苺畑(当時は苺は苺苺と呼ばれていた)(写真3)が広がっていた。

盛岡高農に入学(大正4.4)した賢治は、農場実習で作物の栽培や果樹の剪定、苺の栽培などの農作業を行なったが、それは新鮮な体験であった。その指導に当たったのが農学科の柘植六郎教授である。

ところで柘植六郎教授については、今まで殆ど知られていない。正直なところ柘植教授については、筆者自身も名簿で名前を識る程度であった。昨年開催された盛岡高等農林学校時代の教材掛図展4「盛岡高等農林学校初代校長 玉利喜造と果物寫生畫」(岩手大学ミュージアム主催)で、柘植教授の業績が紹介され、また本人が描いた果物絵図が展示されていたので、筆者は教授について関心をもつようになった。そこでこの機会に柘植教授とはどのような人物か、盛岡高農時代の履歴や業績、柘植教授と賢治との接点などについて調べたので紹介したい。

柘植六郎教授の履歴

柘植教授(1875~1944)の盛岡高農における履歴を中心に紹介しよう(5)。

・本籍:福岡県筑後国三井郡御井町2548番地(士族)

- ・明治8年10月20日：誕生
- ・明治32年9月：東京帝国大学農科大学農学科選科へ入学 全科ヲ脩ム
- ・明治35年7月11日：定期ノ試験ヲ経テ全科ヲ脩了ス
*選科脩了は大学卒業（農学士）ではない。
- ・明治35年8月20日：茨城県農事試験場技師ニ任ス
- ・明治37年4月27日：茨城県農事講習所技師兼茨城県農事試験場技師ニ任ス
- ・明治39年6月8日：依願本職及兼職ヲ免ス
- ・明治39年6月16日：盛岡高等農林学校講師ヲ嘱託ス
- ・明治42年11月1日：栽培部主任ヲ命ス
- ・明治42年12月11日：盛岡高等農林学校教授ヲ命ス
- ・明治43年2月1日：実験農場特別栽培主任ヲ命ス
- ・大正2年10月23日：米国へ出張ヲ命ス
- ・大正3年9月16日：帰朝
- ・大正4年10月20日：文部省視学委員ヲ命ス
- ・大正4年10月20日：宮城山形二県へ出張ヲ命ス
- ・大正5年9月2日：文部省視学委員ヲ命ス
- ・大正5年9月4日：学術上取調為石川新潟富山三県下へ出張ヲ命ス
- ・大正5年9月15日：学術上取調為山形市へ出張ヲ命ス
- ・大正6年12月11日：実験農場長ヲ命ス
- ・大正10年1月26日：農学部長ヲ命ス
- ・大正10年10月25日：文部省視学委員ヲ命ス
- ・大正10年10月25日：宮城岩手二県へ出張ヲ命ス
- ・大正11年3月21日：実験農場長ヲ命ス
- ・大正14年3月31日：依願免本官
- ・大正14年10月7日～昭和5年3月31日：兵庫県立農業補修学校教員養成所所長
- ・昭和5年3月31日～昭和13年10月8日：秋田県立鷹巣農林学校校長
- ・昭和19年9月7日：逝去（70歳）

盛岡高農の創設に際して設置された農学科には、重要な専門分野として■芸及作物教室があり、初代教授として■村 鼎（農学士）（明治37.6～大正2.10：福岡県技師として転出）が招聘され、園芸・作物・農学大意を担当した。

東京帝国大学農科大学農学科選科を脩了し茨城県農事試験場技師をしていた柘植六郎は、明治39年6月16日、同教室の講師として赴任（担当：園芸・同実験・作物・農学大意）、3年後（明治42.12）には教授に昇任した（写真4）。柘植六郎教授は、教育面では農学科及び農学科第2部（後の農芸化学科）において園芸・園芸実験・農場実習で生徒指導（写真5）を行い、また様々な責任ある校務（実験農場長・農学部長・実験農場特別栽培主任・文部省視学

委員・米国出張・生徒入学試験委員・植物園主事など）に携わった。柘植教授は、大正14年3月31日、停年（60歳）を待たず退職した。

柘植六郎教授の業績（著書等）

柘植教授は盛岡高農に就任し数多くの専門書（出版は全て成美堂書店）を著している。出版年順に挙げると以下ようになる。最後の2点は秋田県立鷹巣農林学校校長時代（昭和5～13年）に著したものである。

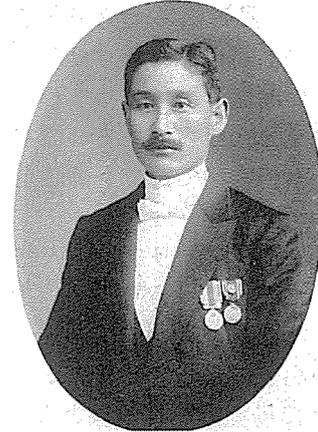


写真4 柘植六郎教授（大正6年）



写真5 柘植六郎教授の園芸実験（大正14年）



写真6 実験果樹園芸新書（明治41年）

- ・実験果樹園芸新書（明治41. 8）（写真6）
- ・実験蔬菜園芸新書（明治43. 11）
- ・園芸果樹教科書（明治45. 1）
- ・園芸蔬菜教科書（大正7. 1）
- ・果樹園芸新書（大正8. 4）
- ・最新果樹園芸（大正14. 1）
- ・最新蔬菜園芸（大正15. 11）
- ・自給自足の農産加工（昭和7. 11）
- ・誰にも出来る農産加工と其の利用（昭和15. 9）

この中でも実験果樹園芸新書（371頁）と実験蔬菜園芸新書（412頁）は大著で、前書は初代校長玉利喜造教授（明治36. 1～明治42. 5）の校閲を受けて執筆した最初の果樹園芸書である。因みに、後述するが玉利喜造初代校長の専門も作物及び園芸である。このように数多くの著書を執筆・出版した教授は、盛岡高農の中でも多くはない。それは同教授が園芸分野についての造詣が深く、更に情報収集と編集において優れていたことを示している。

ところが専門に関連するいわゆる研究論文は見当たらない。その要因としては、当時の高等農林学校における園芸作物分野では農場実習や栽培などの現場実務が中心であり、そのため研究論文の作成は容易ではなく、またそれほど重視されなかったことが挙げられよう。

盛岡高等農林学校の創設に際しては、理論的な学問よりは、理論の実践化（実学）が重視された。そのため柘植教授は園芸分野の実践と啓蒙が重要であると考えていたのではないか。

柘植六郎教授の人脈

柘植六郎は筑後久留米藩士・柘植善吾（1842～1903）の長男として誕生した。柘植善吾は慶応3年開催のバリ万国博覧会に際して、藩最初の留学生として欧州を經由して渡米し法律や農業を勉強した。明治2年3月に帰国後は宮本洋学校総轄（校長）となり、明治11年には■中芳男の世話で農商務省にはいり、駒場農学校校長補兼幹事、更に福井県下の郡長などをつとめた。

田中芳男（1838～1916）は、幕末明治期の博物学者で「有用植物図説」などの著作がある。同氏は我■の教育・殖産の発展に貢献し、駒場農学校（明治11年創立・東京帝国大学農科大学の前身）を創設、上野の山に公園や博物館・動物■を設立、またセイヨウリンゴや田中ビワ（枇杷）を広めた人物である。

柘植六郎の夫人・秋子（明治36. 3. 結婚）は、田中芳男と夫人・栄子（佐倉順天堂の開祖である佐藤

泰然の妹・ふくの孫）の■女である（4）。少し穿った見方であるが、柘植六郎が農学や植物などの分野に進んだ背景には、上記のような類縁の影響があったのではないか。

柘植教授は、盛岡高農の玉利喜造教授（初代校長）・佐藤義長教授（第2代校長）・鈴木梅太郎教授・横井時敬教授と親交があった。それは、柘植教授の米国出張のときに、佐藤義長教授・鈴木梅太郎教授・横井時敬教授が東京駅まで見送りに来たとの記録からも裏付けられる（5）。以下略歴を紹介しよう。

玉利喜造（1856～1931）：駒場農学校の第1期生として卒業（明治13. 3）、米国留学（明治18. 8～明治20. 7）帰国後、東京農林学校教授に就任（明治20. 12）した。その後、東京帝国大学農科大学助教授（明治23）及び同農科大学教授（明治24）に就任し、園芸学講座の専任（明治29）となる（農学博士第1号）。玉利教授は、明治36年1月に盛岡高農の初代校長に就任し、東北農業の振興・冷害凶作の克服・教育研究施設の充実・教育理念の構築などに貢献した傑物であるが、その後（明治42. 5）、郷里の鹿児島高農初代校長として転任した。

佐藤義長（1866～1937）：明治36年3月、盛岡高農創設時に赴任し、農産製造・化学・肥料を担当した。玉利初代校長の転出後、第2代校長（明治42. 5～大正10. 8）として大正期における盛岡高農の発展を担った。大正10年欧米教育視察から帰朝後、新設（大正11年）の宇都宮高農初代校長として転出した。面白いことに佐藤教授は、柘植教授と同様に謡曲や仕舞を能くしたので、学内の謡曲熱が盛んになったと云われる。

鈴木梅太郎（1874～1943）：明治7年、東京帝国大学農科大学（農芸化学専攻）を卒業し、明治39年4月に盛岡高農教授として赴任、主として「植物營養論」を担当した。鈴木教授は、同年9月には農科大学助教授兼務となり、僅か5ヶ月で盛岡を去ったが、その後も東京本務盛岡兼務（大正6. 12. 兼務解除）となり「植物營養論」の講義を継続した。鈴木教授は脚氣の研究・オリザニン（ビタミンB₁）の発見で著名であるが、その研究は盛岡高農での仕事が基礎になっている。

横井時敬（1860～1927）：明治11年9月、駒場農学校農業本科を卒業（農芸化学科専攻）、専門は農学・農業経済・農政学（農学博士）である。明治27年、東京帝国大学農科大学教授、後に東京農業大学初代学長に就任した。同教授の「稲のことは稲に聞け、農業のことは農民に聞け」という言葉は有名である。盛岡高農の講師（農学及び農政学）（明治42～大正15）として毎年来盛し、柘植教授と交誼を結んだ。

校友会報にみる柘植六郎教授の消息

校友会報(明治39. 6. 15. 創刊)は研究報告・論説・講演・紀行・文苑・諸行事・人事等の消息など様々な情報を発信する場であり、年2回発行される。校友会報からその当時の校内状況を知ることができる。そこで盛岡高農に赴任(明治39. 6. 16)した柘植教授に関連する主要記事を抜粋した。

* 校友会報 第4号(明治41. 12. 20)

・去る23日(午前9時、秀清閣にて)、本校職員で組織される遠吠会主催で宝生流謡曲大会を開催した。出席者：佐藤校長、山田・岩住・淵野・植村の教授、門前・三浦の助教授、柘植講師、千葉書記

* 校友会報 第5号(明治42. 11. 28)

・果樹園の垣：本校果樹園には昨夏嚴重な竹垣を設けられたるを以て本年夏秋に於ける果物は手数少なくして諸試験の目的を遂行し■つ充分の収穫ありたりき。殊に中村先生や柘植先生がしばしば生徒を農場に連れ行き実地につきて説明し教室に於けるレクチャーアと連結せらるは生徒等の大に幸福とする所にして百聞一見にしかず。来12月諸種の果樹の冬期剪定を教へんと中村先生の予約は生徒等の最も楽しみとする所なり。

* 校友会報 第6号(明治42. 12. 28)

・果菜剥製法に就いて：発明者 柘植先生談(85~87頁)

・柘植先生教授に任ぜられる。本校講師柘植六郎先生には去る39年本校に赴任せられ、以来中村教授(39年5月欧米へ留学)の後を受けて園芸及作物を担当し多年一日の如く熱誠を以て教授に当られたり。去る9月中村教授帰校後は先ず打合せて該講義の内各論(作物及園芸の総論は中村先生担任)を受持たれ且実験農場栽培部主任として日夜学校のため赤誠を集注し他方其学の研鑽に勉めては果樹園芸新書を著はし近くは過般果菜剥製法を発明せられたり。即ち先生は本校講師として貢献多大なるのみならず、学者として技術者として其効少なしとせざるなり乃ち天網恢々粗而不洩去十二月十一日挙げられて本校教授に拜命し高等官七等に叙せらる。先生の榮譽 何か之に加へん。生徒等双手を挙げて慶賀の念勃々禁ずる能はざるなり。

* 校友会報 第7号(明治43. 3. 11)

・明治43年2月1日付、実験農場特別栽培部主任となる。

* 校友会報 第8号(明治43. 5. 28)

・福島県農事講習同窓会第三回農産物品評会に就

て：柘植教授

* 校友会報 第19号(大正2. 3. 28)

・15日急性肺炎のため療養中。経過良好である。御全快を祈る。

* 校友会報 第23号(大正3. 2. 24)

・米国出張(大正2. 10. 23)

・柘植先生消息：客年11月米国に於る園芸状況調査御要請を帯びて出張せられし柘植先生はその後2回農学2年生へ御通信ありたり。

・第1信：前略11月19日2時に横浜港出帆3日目に暴風雨に会ひしもたいしたことなく平穩に相成申候船中のキャフヒレ(注：キャフエ)には白人男性七人、邦人男性七人有之候…本日目的地に上陸仕候間御報申上候早々(12月4日・シアトル)

・第2信：前略…シアトルポーラント、当地を見、今朝無事桑港に着任候、到る所中々Systematicに果樹栽培行はれ、米国にては果樹栽培は農業より一つのCommercial industry見なされ居る由にて出来たるものは如何にして売るがと云ふ様な事は考ふるを要せず皆一つのPacking companyに運へば其のCompanyが畧各地に支店を有しMost high price地に積出す様に相成居候、実に日本の果樹栽培は之に比すれば小供の仕事位に過ぎざるは残念に御座候早々(12月15日・サンフランシスコ)

* 校友会報 第27号(大正4. 5. 27)

・Oregon(オレゴン)洲ノ苹果：教授 柘植六郎(1~12頁)
米国出張から帰国(大正3. 9. 16)後に寄稿した見聞録

* 校友会報 第30号(大正5. 2. 7)

・文部省視学委員を命ず(文部省)(10月20日)

* 校友会報 第32号(大正5. 11. 25)

・果樹園の近況(雑録)：柘植教授

・文部省視学委員を命ず(文部省)(9月2日)

* 校友会報 第37号(大正7. 12. 10)

・山田教授の後任として農場長となる。

* 校友会報 第39号(大正8. 8. 10)

・実験農場園芸部主任を命ず(5月30日)

* 校友会報 第42号(大正10. 7. 12)

・農学部長・植物園主事を命ず(1月26日)

* 校友会報 第44号(大正11. 12. 18)

・実験農場長を命ず(3月28日)

・文部省視学委員を命ぜられ1月12日より12日間宮城岩手両県へ出張(文部省)

* 校友会報 第48号(大正14. 10. 5)

・陞叙高等官二等及び叙正五位(大正14. 3. 28)

柘植六郎教授の趣味と人柄

柘植教授は趣味の人であった。その一つが謡曲・鼓・舞である。高農職員で組織された遠吠会主催で宝生流謡曲大会が開催され、佐藤義長校長はじめ多くの教授・助教等が出席、柘植講師も参加したと云う（校友会報 第4号）。また教授は、鼓一調、片桐氏・千葉氏・久慈氏等との謡曲・鼓の稽古に励んだ（大正元. 9. 21）。岩手日報（大正11. 2. 11）には、柘植六郎氏の記事「盛岡寶生会月旦：煙の人（柘植六郎氏）」（写真7）が掲載されている。教授の人柄を表しているのので、全文を引用しよう。

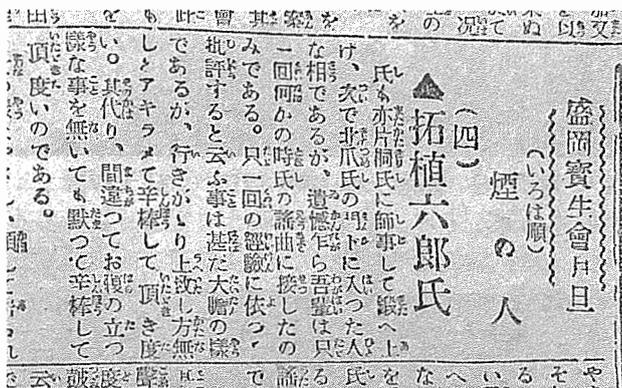


写真7 岩手日報の記事（大正11年2月11日）

「氏は亦片桐氏に師事して鍛へ上げ、次で北爪氏の門下に入った人の相であるが、遺憾乍ら我輩は只一回何かの時氏の謡曲に接したのみである。只一回の経験に依つて批評すると云ふ事は甚だ大胆の様であるが、行きが、り上致し方無しとアキラメて辛抱して頂き度い。其代り、間違つてお腹の立つ様な事を無いても黙つて辛棒して頂度いのである。

女の様なやさしい顔して居られる氏の謡ひは、夫は又女の様にやさしいものであつた。顔色一つ変へるでも無く、ホントに謹み深いと云つた様に控へ目控へ目と謡つて居られた「私などはどう致しまして」と云つた様に只々形にはまつた通り謡つて居られた。時々あやまれる点が無いでも無かつたがそれでも規則正しい謡ひ振りであると思つて拝聴した。そして美しい声だと思つた。然し其控へ目控へ目と謡ふ内にも何処かしら派出な処があつたに記憶する。謡曲家を派手と渋味と両様に分つならば氏は正に此派手に属すべき人である。のみならず氏は好んで派手に謡はうとする人の様に思はれたのである。

氏は謡曲のみならず鼓もやる。其鼓も亦女の様な手で、女の様な声で「ハオーポン」とやるのだ。丁度

業平か小町に逢へぬツレヅレを鼓に依つて慰められて居ます。と云つた風に「ハオーポン」とやるのである。イヤハヤ其やさしい事つたら、我輩は氏の鼓打つ姿を見て「ア、此姿を伊藤白蓮や原阿佐男に見せ度いものだ」と思つた。何故さう思つたか夫は我輩自身にも分らない。只つくつくそう思つたのである。

氏は尚舞もやられる相であるが遺憾ながら夫は未だ拝見した事がない。然し失礼乍ら大抵謡曲や鼓と同一程度のものと思はれる。

要するに氏は謡曲界に於ける名声よりも、高等農林の植物学の先生として名高い人であると云ふ方が適切かもしれない。」

柘植教授は「女の様なやさしい顔し・顔色一つ変へるでも無く、控へ目控へ目と謡つて居られ・派手で・其鼓も亦女の様な手で、女の様な声で“ハオーポン”とやるのだ。」この記事から、柘植教授はやさしい立ち振る舞いの温和な人物であるように見え、それは肖像写真（写真4）からも伺える。

ところが、記者は「氏は謡曲界に於ける名声よりも、高等農林の植物学の先生として名高い人であると云ふ方が適切かもしれない。」と結論している。つまり、高農の植物学の先生としては著名であるが、謡曲は趣味のレベルに留まるといふことか。

柘植教授は、盛岡高農在任中に絵を描いている。同教授が教材として描いた柿の水彩画（16種類）（写真8）（写生年1909と落款「ツゲ」がみられる）が残されている。大正13年には、シクラメン・葡萄・ダリア・林檎・柿の油絵を仕上げ、その内2点を高農の油絵展覧会に出品（大正13. 11）したと云う（5）。残念ながら、それらの油絵は残されていない。

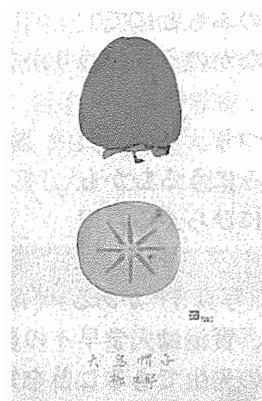


写真8 柘植六郎教授自筆の水彩写生図（柿 大島帽子：1909年）

柘植教授は、大正13年頃に、五味氏と佐々木氏に師事して油絵の講習・指導を受けた（5）。五味氏とは盛岡生れの五味清吉（1886～1954）であろう。五味清吉は、東京美術学校西洋画科（現東京芸術大学美術部絵画科）卒業、萬鉄五郎と同時代に岩手美

術界の中心的存在として活躍した画家である。農業教育資料館（本館）講堂に飾ってある上村勝爾第4代校長の肖像画は、五味清吉の作品である。佐々木氏は佐々木精治郎（岩手県水沢市出身）（明治18～昭和46年）と推定されるが、詳細は不明である。

柘植教授は音楽を愛好し、米国出張の際に蓄音器を購入（大正3.8.6）して盛岡に持ち帰っている。また数多くのレコードを所蔵していたと云われる（5）。

柘植六郎教授と賢治

農学科第2部（大正4.4）に入学した賢治は、前年に米国出張から帰朝した柘植教授から■芸の講義や農場実習を受けた。当時のカリキュラム（学科目及毎週教授時数）によると、柘植教授の農場実習は第1学年の第1学期から第2学年の第2学期まで、園芸の講義は第1学年の第2学期から第2年の第2学期まで必須である。つまり賢治は、公式には入学した4月から柘植教授の農場実習を受け、2学期から園芸を受講している。

柘植教授を詠った作品（I）

賢治は高農在学中に多くの短歌を作ったが、入学した年の作品群（2, 3）の内、以下の2首は枠で囲まれ、その右肩に「◎苺畑の柘植先生」のメモがあることから、柘植教授を詠ったものと思われる。

苺畑の柘植先生

かゞやける
 かれ草丘のふもとにて
 うまやのなかのうすしめりかな

ゆがみうつり

馬のひとみにうるむかも
 五月の丘にひらくる戸口

下台に苺畑（写真3）がある。「苺畑の柘植先生」とあることから、賢治は入学早々の農場実習で、柘植教授が苺栽培の先生であることを知ったと思われる。上台にも広大な実験農場（水田・作物・桑■・牧草地など）が広がり、牧草地では牛や山羊などが飼われていた。本館の裏側にある実験農場部の建物群（写真9）の中に2階建ての大きな畜舎（87坪）があり、左（西）右（東）の2階戸口に通ずる小高い丘のような土盛りがみられる（写真10, 11）。賢治の短歌は、この畜舎の印象を詠ったものであろう。「苺畑の柘植先生」の注⁽³⁾には、「柘植六郎教授

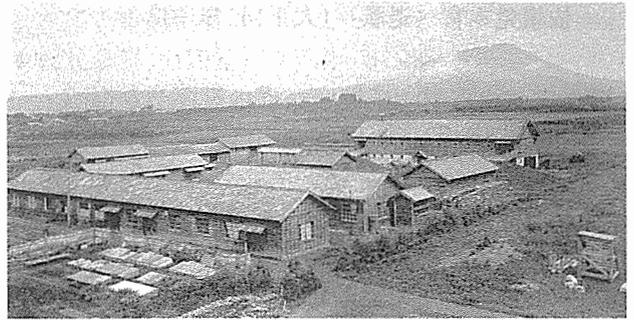


写真9 上台の実験農場部：畜舎は右最奥の大きな建物（大正元年）



写真10 畜舎：右（東）戸口（大正元年）



写真11 畜舎と時鐘：左（西）戸口（大正8年）

は趣味と教養の高い温和な先生で、賢治は秘かに私淑した。油絵も描き、音楽についての賢治の最初の教養などは、この先生に啓発されたものらしい。」とあることから、賢治は公私にわたり柘植教授の近くにいて多くの影響を受けたのではないかと推測される。

余談になるが、時鐘（写真11）は、創設時には第1・第2教舎間の講堂前に置かれていたが、大正初期に畜舎左側の土盛りに移設された。この鐘は長い間、盛岡高農・上田の森で時を告げていたが、現在、農業教育資料館に保存されている。

柘植教授を詠った作品（Ⅱ）

大正6年4月日付の作品（2，3）に、蓄音器とラッパを詠った3首がある。

会はてぬ
ラッパ剥げたる蓄音器
さびしみつまた
丘をおもへり

ひしげたる
ラッパの前に首ふりて
レコードを聴く
幹事の教授

ひしげたる
蓄音器のまへにこしかけて
ひるの競馬をおもひあるかな

あまり立派ではない蓄音器のラッパの前でレコードを聴いている様子を詠ったものである。キーワードは競馬と蓄音器と幹事の教授である。競馬とは当時高農北側に隣接した「八幡森の黄金競馬場」である。このことは賢治が音楽を聴いた場所が高農校内であることを示している。「音楽を愛好していた柘植教授（幹事）が米国から持ち帰った蓄音器を校内に持ち込みレコード鑑賞会が開催され、賢治も教授に誘われてレコードを聴いていた。」これらの作品はその時の状況を詠ったものか。筆者の推測である。

柘植教授を詠った作品（Ⅲ）

「春と修羅 第1集」の「習作」(1)という作品（大正11.5.14）に、柘植さんという名前が登場する。以下はその抜粋である。

キンキン光る
■班尼（すばにあ）製です
（つめくさ つめくさ）
こんな舶来の草地でなら
黒砂糖のやうな甘つたるい声で唄つてもいい
．．．．．
ほうこの麦の間に何を播いたんだ
すぎなだ
すぎなを麦の間作ですか
柘植さんが
ひやかしに云つてあるやうな
そんな口調がちゃんとひとり
私の中に棲んである
和賀の混んだ松並木のときだつて

さうだ

「柘植さん」とは柘植六郎教授のことである。賢治は、光り輝くスペインに居るような心地良い気分「舶来のつめくさの草地」を歩いている。麦の畑にはすぎながいっぱいはえている。そのとき、かつて在学中に園芸を学んだ柘植教授が「すぎなを麦の間作ですか」と「やさしい女のような口調でひやかしを云っているような情景」を思い浮かべたのであろう。卒業して4年も経っているが、「自分の中に柘植さんが棲んでいる」と賢治は懐かしく回想している。

柘植六郎教授は、明治39年6月16日、盛岡高等農林学校農学科（園芸及作物教室）に赴任し、主に「園芸・園芸実験・農場実習」を担当した。在任中数多くの果樹園芸や蔬菜園芸の著書を発表した。柘植教授は謡・鼓・舞・油絵・音楽など趣味の人でもあった。大正4年に入学した賢治は、柘植教授から園芸の講義と農場実習の指導を受けた。賢治の作品には柘植教授の名前が登場することから、公私において多くの影響を受けたと思われる。

次■は以下の論点を述べたい。柘植教授は文部省視学委員として近隣の農学校を視察し、実態調査を行なっている。岩手日報に掲載された視察記事などから、当時の盛岡高農の教育理念や農学校の状況、花巻農学校における賢治の授業などについて考察する。また盛岡高農退職後の柘植教授の消息についても言及する。

本稿をまとめるに当たり、上野 誠氏（奈良大学文学部教授）、前田克己氏（山梨グルメリイチ館前田）、城島紀夫氏、秋■県立秋田北鷹高等学校（高橋 哲教頭）、寿松木 章 岩手大学名誉教授（農学部果樹園芸学研究室）、工藤 朗氏（岩手大学）には貴重な資料を提供して頂きました。ここに謝意を表します。

参考資料

- 1) 宮沢賢治全集Ⅰ：宮沢賢治、ちくま文庫、筑摩書房、40（昭和61年2月16日）
- 2) 新校本 宮沢賢治全集 第1巻 短歌・短唱 本文篇：宮沢賢治、筑摩書房、154、214（平成8年3月25日）
- 3) 宮沢賢治歌集：宮沢賢治、森莊巳池 校註、未知谷、85、122（平成17年12月）
- 4) 果樹園芸学：金浜耕基編、文永堂出版、297（平成27年3月）
- 5) 柘植六郎 履歴と日記：非公開資料（個人）